

高校生の英語スピーキング力に関する実証的研究

— 2種類のスピーキングテストを用いて —

上西幸治

(2003年9月30日受理)

An empirical study of Japanese high school students' English speaking proficiency:

Introducing two kinds of speaking tests

Koji Uenishi

The aim of this paper is to pursue the factors contributing to high school students' speaking proficiency.¹ In this paper, the data obtained were computed and the multiple regression analysis was conducted with the results of two types of speaking tests: the "picture-cued test" and the "topic-based test" were the dependent variables, and the other tests plus eight metacognitive factors were the independent variables. The result showed that the common factor contributing to speaking proficiency was comprehensive English ability. On the other hand, the diverse factors between the two were grammatical ability (topic-based test) and trying to focus on the content to convey meaning and obstructive factors of speaking: (1) linguistic processing strategy.

Key words: Speaking proficiency, High school students, Contributing factors

キーワード：スピーキング力，高校生，説明要因

1. はじめに

スピーキングの能力に焦点を当てた研究は、近年増加している。一口にスピーキング力といっても、他の3技能（リーディング、ライティング、リスニング）と同様、その中身は広範囲に及ぶ。例えば、焦点の当て方として、スピーキングの指導方法、その評価方法、スピーキングテストの妥当性、あるいはスピーキングのプロセスなど、枚挙に暇がない（瀧口 2003, 藤森 2002, Barker 2001, Okamoto & Matsubara 2001, etc）。他の技能に関わる研究では、リーディング力の構成要素に関する研究（本岡2000）、リスニング力の構成要素に関する研究（Abe 2003, Yamaguchi 2001,

Nishino 1992）などが挙げられる。

スピーキング力に関する構成要素に関わる研究としては、Nakamura (1993) や Ozasa (2002) がある。しかし、スピーキング力に関わる研究は依然としてごく僅かであり、いずれも大学生を対象にしたものである。少し具体的に述べると、前者の Nakamura の研究では、Bachman (1990) のコミュニケーション能力の下位能力に関する研究を基に、各種スピーキングテストを実施している。その結果、スピーキング力の構成要素として、言語的な能力、相互交流及び社会言語的能力が表出したと述べている。また、後者の Ozasa (2002) では、言語能力以外の要素、例えば動機づけや学習環境などの要素も加えて、スピーキング力に影響を与える要素の研究を行っている。その研究によれば、スピーキング力を説明する要素としては、言語能力そのものではなく、非言語能力の「内的動機づけ (intrinsic motivation)」であるという結果が出ている。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：小篠敏明（主任指導教官）、三浦省五、
中尾佳行、森 敏昭、縫部義憲

本研究では、高校生のスピーキング力の説明要因に焦点を当ててみた。この研究が、学習者が切望するスピーキング力の向上に役立つための基礎研究となることを望むものである。

2. 研究目的・方法

2.1. 研究目的

スピーキング力については、発話内容やその場面などから様々な定義がなされている。相手とのインタラクションが十分に可能な、総合的なコミュニケーション能力をスピーキング力とするのか、それともスピーチなどのフォーマルな場面で相手に発信ができることを指すのかなど、一様ではない。本論では、実施テストも考慮してスピーキング力¹⁾を「日常で相手に自分の伝達すべき内容を英語で発信することができること」と定義したい。研究目的としては以下の通りである。

- (1) 2種類のスピーキングテストをそれぞれ従属変数として、スピーキング力に関わる要因は何かを明らかにする。
- (2) 2種類のスピーキングテストによる説明要因の自身(共通点・相違点)について検討する。

2.2. 被調査者

県立高校1年生70名を被調査者として、本研究を実施した。被調査者は全体的に英語学習に対する motivation は高く、積極的に英語学習に励む傾向がある。総じて、実用英語技能検定で準2級から3級レベルの学習者である。

2.3. 実施方法

本研究の実施方法として、下記にあげる各種英語テストとスピーキングのメタ認知(発話ストラテジー等)に関するアンケートを実施した。そのアンケートを集計し因子分析を行った。スピーキングテストの得点を従属変数、他の言語能力及びメタ認知等のデータを独立変数として、重回帰分析を行った。以下がその実施したテスト及びアンケートである。

従属変数

- (1) スピーキングテスト (Picture-cued Test)

絵を見てその内容を説明するテスト

- (2) スピーキングテスト (Topic-based Test)

趣味について自由に語るテスト

独立変数

- (1) リスニングテスト (CELT-A)

- (2) 語彙テスト (平成9年度第1回実用英語技能検定準2級及び3級の問題)

- (3) 文法テスト (CELT-A)

- (4) クローズテスト

平成9年度第1回実用英語技能検定3級の英文問題から、クローズテストを作成

- (5) メタ認知等に関するアンケート (Appendix 1)

Oxford (1990), 石原 (1999) のメタ認知に関するアンケート項目を参照して作成

スピーキングテストの実施方法及び評価方法については以下の通りである。

〈Picture-cued Test〉

実用英語技能検定2級の2次試験で使用されている2コマの絵を用いて実施した。

LL教室にて、同時にスピーキング内容を録音する方法をとる。その手順は以下の通りである。

- ① 絵を提示して、その絵に関する英語表現を考えさせる。(30秒間)
- ② テープを押して、絵の内容や考えられる事を話させる。(90秒間)
- ③ 教師が発話をストップさせ、絵に関するALTの質問を流す。
- ④ その質問に答えさせる。

評価方法はACTFL(全米外国語教育協会)とアルクが共同で開発したSST(Standard Speaking Test)を基に、独自に評価基準を作成し、ALTとJTEの2名が5段階スケールで評価を行った。評価基準は、以下の8項目の視点で実施した。

内容、一貫性、発話パターン、流暢さ、正確さ(文法)、理解可能度、発音(訛り)、発話語数

〈Task-based test〉

被調査者の趣味等で興味深いことを自由に述べさせる内容である。実施方法は、30秒間時間を与えて考えさせたあと、60秒間自由に語らせた。評価方法や基準に関しては、Picture-cued Testの場合と同様である。

スピーキングテストを実施した直後に、被調査者のスピーキングに関わるメタ認知を探るために、アンケートを実施し、そのあと因子分析を行った。その結果、以下の8因子が表出した。

第1因子 内容焦点化

第2因子 コミュニケーションに対する積極的な態度・姿勢

第3因子 言語処理能力不足

第4因子 包括的語彙知識把握

第5因子 スピーキング方略

第6因子 処理能力・言語知識把握

第7因子 単語発音の不安

第8因子 コミュニケーション方略・背景知識把握
スピーキング力を従属変数、語彙・文法・クローズ・リスニング及びメタ認知の各因子を独立変数として、SPSSで重回帰分析を行った。そのデータ結果が以下の通りである。

4. 結果と考察

4.1. Picture-cued Test の分析

このスピーキングテストを従属変数として分析したデータ結果は以下の通りである(上西 2002)。スピーキング力に対して、因子1(内容焦点化)は標準偏回帰係数(ベータ)が0.276 ($p < .05$)という結果が出た(Table 1)。内容伝達しようとする際に、その内容をきちんと整理し、焦点を絞る必要性に対する認識が、説明要因として大きくスピーキングの能力に影響しているといえる。

次に説明要因として大きいのは、クローズテストである。標準偏回帰係数(ベータ)が0.326で、有意確率0.082で有意傾向があるという結果が出た。クローズテストは、言語能力の視点から見ると、スピーキング力に一番大きな影響を与えている要因として挙げられる。つまり、総合的な英語能力がスピーキングの能力と大きな関係があることが推察される。

Table 1. Picture-cued Test

回帰 従属変数：英語スピーキング			
R=.567 R ² 乗=.322			
F=2.415 p<.05*			
モデル	β	t	p
CLOZE	0.326	1.769	0.082+
因子1 内容焦点化	0.276	2.023	0.047*

+ : $p < .10$ * : $p < .05$

4.2. Topic-based Test の分析

まず、Topic-based Test を従属変数にした場合の分析結果を検討したい(Table 2)。メタ認知に関わるものでは、スピーキングの阻害要因である因子3(言語処理能力不足)は、ベータ値が-0.357でマイナスで有意差($p < .05$)が出た。また、総合的な英語力(クローズテスト)は、ベータ値が0.449で有意差($p < .05$)が表出し、文法力に関しては、ベータ値が-0.342でマイナスで有意差($p < .05$)が出た。

Table 2. Topic-based Test

回帰 従属変数：英語スピーキング			
R=.647 R ² 乗=.418			
F=3.415 p<.005***			
モデル	β	t	p
文法	-0.342	-2.148	0.036*
CLOZE	0.449	2.602	0.012*
因子3 言語処理能力不足	-0.357	-2.431	0.018*

* : $p < .05$ *** : $p < .005$

文法力でマイナスの有意傾向が表出した背景としては、文法的な力に依存して(気にして)言いたいことを伝達しようとしてもできない状況にあることを被調査者が感じ取っていることが推察される。特に、Topic-based Test では、テストである限り、限られた時間内で自分自身のことを語らなくてはならないという状況がある。高校1年生レベルの発話力を考えれば、その時間内で自分自身を表現する際に、文法を逐一気にしては、精神的な不安や焦りなどもあり、自己表現をすることができなくなる状況に陥ることが考えられる。このように、被調査者の心理的な側面から被調査者の持っている文法力が、英語力(発話力)にマイナスに働いている要因になっていることが推察される。

次に、スピーキングの阻害要因については以下のことが考えられる。アンケートの内容を検討すると、語彙・文法・文章構成力など英語力全般に亘って、言語を処理するのに必要な英語力の不足を学習者が感じ取っているようである。確かに、高校1年生レベルでスピーキングの阻害要因が話者のスピーキングにマイナスに働いていることは、ある意味で当然のこととして頷ける。阻害要因が除去されれば、被調査者のスピーキングに肯定的な影響を及ぼし、より発話がスムーズになっていくと思われる。

4.3. スピーキングテストの比較分析

2種類のスピーキングテストのデータ結果に基づいて、重回帰分析の結果を比較検討してみると、以下のことがいえる。共通する説明要因としては、総合的な英語力が挙げられる。異なる点としては、Picture-cued Test の場合には、因子1(内容焦点化)に有意差が見られ、総合的な英語力に関しては、有意傾向が見られた。

Picture-cued Test と Topic-based Test の2つの種類のテストによるデータ結果(有意差のある説明要

因)について検討してみよう。

1) Picture-cued Test の場合

- ・クローズ (有意傾向) ・内容焦点化

2) Topic-based Test の場合

- ・クローズ ・文法力 (-)
- ・言語処理能力不足 (-)

2種類のスピーキングテストの説明要因について、メタ認知的視点と言語能力的視点という2つの視点から考察を行った。

まず、メタ認知的視点からスピーキング力の説明要因について論じよう。メタ認知的視点では、2種類のスピーキング力の説明要因で共通する要因は表出しなかった。一方、異なる説明要因としては、上記したように、内容焦点化 (Picture-cued Test) と言語処理能力不足 (Topic-based Test) であった。その相違理由としては、テスト自体の内容によるものが大きいと思われる。つまり、絵を見て内容を説明するテストでは、すでに語る内容やその過程も絵を提示することで制限されすぎているがゆえに、限定的な内容に焦点を当てざるをえないということが考えられる。しかも、テストが絵を見て行うため視覚的にも被調査者に制限を課している。更に言えば、絵による語彙の限定に一層拍車がかかり、被調査者の発話が極めて限定的で焦点化されたものとならざるを得ないことになる。それが、内容焦点化というメタ認知能力を表出したと考えられる。

一方、トピックを与えてそれに関して被調査者に自由に語らせるテストでは、述べようとする内容は上記のテストほど制限を受けていない。タスクに関して、自分自身のことについて語ればよいのである。トピックは決められているものの、自分自身のことについて幅広く語ることが可能である。つまり、内容焦点化することがそれほど必要ではないことが予想される。その結果、話者の伝達したい内容を表現するための言語的な能力がより必要とされることになる。また、Topic-based Test の場合、スピーキングの阻害要因が要因としてマイナスで有意差が表出する結果が出た。このことについては、Topic-based Test の場合、より自由に発言をすることが求められるがゆえ、学習者の情意面の影響がより大きくなることが考えられるであろう。

次に、言語的な視点からデータを考察してみよう。データ結果から見ると、スピーキング力に関して総合的な英語力が重要な要因であることが分かる。Picture-cued Test の場合、有意傾向が出ており、Topic-based Test の場合、有意差が出ていることでも明らかである。ただ、相違点としては、Topic-based Test の場

合、文法力がマイナスで有意差 ($p < .05$) が出ていることである。その原因の一つとして考えられることは、学習者の言語レベルであろう。高校1年生レベルで、自由に発話をする際に文法を気にしすぎていたのでは英語で発話をするのが困難になることが予想される。つまり、コミュニケーションをベースに考える場合、ある程度の文法力を身につけていることで、自分の考えや思いを他人に語る際に、英文構成等を考えすぎるあまり、結果的に阻害要因となることを示していると思われる。

最後に、語彙力の点からこのデータ結果を考察したい。スピーキング力 (発話力) と語彙力の関連性は言うまでもないことであろう。発話をする際に単語を口頭で発する必要があるがゆえに、それは自明の理である。そのことを考えれば、スピーキング力の説明要因として、語彙力が表出するはずであるが、本論文ではそのような結果が生じてはいない。この意味する所は、語彙力を測定するテストとして、実用英語技能検定のテスト、いわゆる主に受容語彙を測定するテストのみを実施したことには原因があるのではないかと思われる。語彙の尺度として、受容語彙ばかりでなく、発表語彙の視点からも見る必要があると思われる。

5. おわりに

今回の研究で、スピーキング力を説明する要因の模索を行ってきた。結果として、2種類のスピーキングテストにおいて、スピーキング力を説明する要因に違いが生じている。それは、一つにはテストの内容の違いによるところが大きいと考えられる。つまり、絵を見て発話させるのか、それとも自由にテーマに基づいて語らせるのか、このスピーキングテストの違いから生じているものと考えられる。とはいえ、共通と思われる言語的な要因、つまり総合的な英語力を無視してはならない。スピーキング力にはトータル的な英語力が関わっていることが本研究から分かったことは意味があると思える。しかし、総合的な英語力とは何なのか、その英語力の中身に関わる要因を増やし、もっと検討する必要がある。その英語力のどんな側面が特に関わりがあるのか、その中身がより明確になれば、スピーキング力を伸長する上で、学習者に何らかの有効な手だてを明示できるのではないかと考える。

一方、メタ認知的な側面から見た場合、スピーキング (発話) をする際に、阻害要因となっているものを除去することが肝要といえる。テスト方法を鑑みれば、ある程度自由に発話する際には、スピーキングの阻害要因の除去は重要な点と考える。メタ認知のデータを

見るかぎり、言語に関わる部分での障害が大きいようである。例えば、単語が出てこないこと、文法構造の理解不足、文章構成や連結の問題などがアンケート結果から表出している。この点は、学習者に自信を持たせたり、発話練習を増加させたりする教師の指導方法の改善などによって、学習者のスピーキング力を向上させる実践が可能ではないかと考える。

また、語彙力の視点を見直して、スピーキングに関する研究をする必要性も感じている。今回の研究では語彙力が説明要因として表出していないが、語彙力に焦点を当てる必要があるであろう。そのために、語彙をただ知識として知っている受容語彙だけではなく、語彙をどのように使えるか、つまり発表語彙に関するデータを集計し、それを要因の一つに加えて研究する必要性があると考え。その点も鑑みて、今後も実践及び研究を継続して、学習者に有効な研究結果を提示できるように努力していきたい。

【註】

1) スピーキング力を記述する際、様々な解釈がある。speaking ability という場合、一般的な抽象概念としてその力を述べる。しかし、本論の場合、スピーキング力を測定された能力 (measured ability) とみなして、speaking proficiency を用いている。

また、言語能力と運用能力の関係等が問題なるが、本論ではその点について探索する研究を行ったものではない。つまり、そのモデルを明瞭にすることが本論の目的ではなく、一体となったスピーキング力に影響を及ぼす要因について単に探索した論文である。

【参考文献】

- 馬場 哲男 編著 1997. 英語スピーキング論—話す力の育成と評価を科学— 河源社
- 小室 俊明 1997. スピーキング能力の構造と指導 二松学舎大学 国際関係論集5, 87-96
- 藤森 千尋 2002. コミュニカティブタスクにおけるスピーチプロダクションの分析: 正確さ・流暢さ・複雑さの測定方法 第28回全国英語教育学会神戸研究大会 (統一体第2回大会) 発表資料
- 石原 義文 1999. 「読解過程における Metacognitive Awareness の変移に関する研究」 *ARELE* 11, 51-60
- 本岡 直子 2001. 外国語を読む力を構成する要因

広島大学大学院教育学研究科博士論文

- 上西 幸治 2002. 高校生の英語スピーキング力に関する実証的研究—説明要因を中心として— 日本教科教育学会愛知大会発表原稿
- Abe, N. (2003). The factors explaining English listening ability of Japanese high school students. *ARELE* 14, 121-130.
- Backman, L. F. 1990. *Fundamental considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Barker, D. 2001. Using speaking tests with large groups in the Japanese universities classroom. *J. Hokkai-gakuen University* No.107
- Brown, G., & Yule, G. 1983. *Teaching the Spoken Language*. Cambridge University Press
- Fukazawa, S., Ozasa, T., Matsuo, S., & Fukutoku, K. 2002. An empirical study of the factors contributing to Japanese Junior High School students' listening ability in English. *Bulletin of Graduate School of Education, Hiroshima University*. Part II, 51, 171-176.
- McEvoy, K. A. 2002. Speaking out: Oral communication in the writing classroom. A dissertation presented to the Faculty of The Graduate School at The University of North Carolina at Greensboro, for the Degree of Doctor of Philosophy.
- Mikuma, Y. 1995. Speech communication factors affecting EFL learners. *ARELE* 6, 85-93.
- Nakamura, Y. 1993. Measurement of Japanese college students' English speaking ability in a classroom setting. A dissertation presented to the Division of Education, the Graduate School of International Christian University, for the Degree of Doctor of Philosophy, unpublished.
- Nation, I. S. P. 2001. *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nishino, T. 1992. What Influences Success in Listening Comprehension? *Language Laboratory*, 29, 37-52.
- North, B., & Schneider, G. 1998. Scaling descriptors for language proficiency scales. *Language Testing* 15(2), 217-263.
- Okamoto, D., & Matsubara, K. 2001. Evaluating Aomori Public College's English language program. *Journal of Aomori Public College* 7(1), 16-45.
- Oxford, R. L. 1990. *Language Learning Strategies*. Heinle & Heinle Publications.

- Ozasa, I. 2002. Factors affecting the Japanese English as a foreign language (EFL) learners' speaking and listening proficiency. A paper presented to the graduate school of California State University, Sacramento, for the Masters Thesis (MA), unpublished.
- Robinson, G., & Midorikawa, H. 2001. How reliable and valid is the Japanese version of the strategy inventory for language learning (SILL)? *JALT Journal*, 23, 2, 202-226.
- Purpura, E. J. 1997. An analysis of the relationships between test takers' cognitive and meta-cognitive strategy use and second language test performance. *Language Learning*, 47, 2, 289-325.
- Salaberry, R. 2000. Revising the revised format of the ACTFL oral proficiency interview. *Language Testing*, 17(3), 289-310.

(主任指導教官 小篠敏明)

Appendix 1

スピーキングに関するアンケート

あなたがこの英語スピーキングテストの時にとった行動について答えてください。賛成(5), やや賛成(4), どちらでもない(3), やや反対(2), 反対(1)で答えてください。

1. 話しながら、話す内容が予想できた。
2. 話す内容の重要な部分を発話できた。
3. 細かい説明を伝えることができた。
4. これまで知っていたことが、英語を話すときに役に立った。
5. 全体として話す内容をうまく発話できた。
言えないことがあったとき、どのようにしましたか?
6. 無視して別のことを言った。
7. 言えない部分をもう一度言い換えた。
8. 言えない部分よりも言える部分を探した。
9. あきらめて話すのをやめた。
10. 日本語から派生する別の言葉を探そうとした。
効果的に話すために注意したことは
11. 単語(文章)の一部を心の中で思い浮かべて話した。
12. それぞれの単語(言葉)の意味を理解しようとした。
13. 文法的な構文に注意した。
14. そのトピックについて知っていることを思い出そうとした。
15. 文章全体の構造に注意した。
あなたにとって、話すことを難しくしていることは
16. 間違いを恐れること。
17. 単語の発音ができないこと。
18. 習っている単語(言葉)が口から出てこないこと。
19. 文法的な構造がわからないこと。
20. そのトピックについて既に知っていることが少ないこと。
21. 文章をつなげることができないこと。
22. 文章全体を考えながら話すことができないこと。
23. 語彙力が足りないこと。
24. 逐一、日本語から英語に変えようとする。
英語を話すのが上手な人は、どのような人だと思いますか?
25. 単語を多く知っている。
26. 単語の発音ができる。
27. 文章全体のことを全く考えないで話す。
28. 辞書をうまく使いこなせる。
29. 単語(言葉)の言い換えができる。
30. すでに知っている事と話そうとしている事を結びつけられる。
31. 文章の細部(前置詞や時制などの使用方法)を気にしない。
32. 文章全体の構造がわかる。
33. 豊富な話題(知識)を持っている。
34. 相手のことを考えて、分かりやすく話す。
35. ジェスチャーを交えて気持ちを込めて話す。
36. 相手の目を見ないで、下を向いて話す。
37. 自信をもって(自分の力を信じて)堂々と話す。
38. 相手と言葉のキャッチボールをするように努める。